

わが国の道路交通文化－照明環境と音声環境 (ドイツとの対比)

菊池悦朗

Straßenverkehrsklima in Japan - Überreizung durch Licht und Lärm (Ein Vergleich mit Deutschland)

Etsuro KIKUCHI

はじめに

ドイツでは建物の廊下や階段などの電気が多くの場合、自動的に消されるシステムになっている。省エネ（ルギー）[Energiesparen] のためだ。また、一般にドイツでは照明を直射するのは避けることが多く（間接照明）、蛍光灯による照明も特に家庭ではなぜかあまり見かけない。青い眼には人工的な光は辛いようである。ホームステイしたり学生寮に泊まった際にも経験したことが、廊下の照明が夜でも自動的に消されたり、夜パーティーなどで家庭に呼ばれたりした時なども、その家庭のトイレまでの道（通路）がとても暗かったりしたこともある。省エネの点では優れているといわれてきた蛍光灯を避け、好んで暗い中にいるということは、それにムードや情緒（Gemütlichkeit）を感じるということでもあるのだろうか。フライブルクの小さな湖の岸を夜、歩いて約40分で一周した際、湖岸の照明が本当に暗く、ベンチに座る男の顔もよく識別出来なかった記憶がある。行きずりのその男と雑談したのだが、終始彼の顔立ちがはっきり見てとれなかった。かつて私はスイスのバーゼル大学の学生寮に5ヵ月半滞在したことがあるが、その学生寮の廊下の照明のスイッチが例によって約1分30秒で自動的に消えるものと、手で点灯と消灯をさせるスイッチとに設定が分かれていた。後者の方のスイッチをある日の昼間、親しくしていたポーランド人の男が「Umweltschutz（環境保護）！」と言いながら押し消したことが今でも印象に残っている。安全とか環境面、その他、様々な場面での行為の点で、このポーランド人がしたような行為に限らず、自分で責任を負う、自発的に行なうという面がドイツではわが国よりはるかに強い。あちこちに「(Benutzung) auf eigene Gefahr」（危険があっても自分の責任で〔使用すること〕）という看板を見かける。（少し逸れるが、かつて[1996年] 私はベルリンのホームステイ先で1000スイスフランの盗難にあったので、自己責任、自己管理という点では大きなことは言えない）。そして、「公」に対して「個」の行動の面がドイツでは強い²⁾。

りドイツ語圏だけでなくヨーロッパ全体に当てはまるケースでも単にドイツと書いた場合がある。ドイツ、ドイツ語圏、ヨーロッパと書き分けることが不可能ないし難しい場合、あるいは私には不明の場合もそうした。

²⁾ 「お上が与えた環境に私人はたちまち順応してしまい、批判的視点はまるでない」(中島義道『ぼくは偏食人間』、22頁)

一方、わが国の照明環境は、最近、改善はみられてきてはいるが、ドイツとはまだかなり異なっている面がある。街灯や道路の照明ひとつとってみてもそうで、これは例えば電柱の地下化などということとは別のレベルの問題だと私は思う。

ごく一部の人達にしか意識されていないわが国の道路交通(文化)[Straßenverkehr(skultur/klima)]³⁾(に限らないが)に関する苛立たしい現象がずっと続いてきている。そのひとつは照明環境、もうひとつは音声環境に関する事で、この2つの領域に関し、ドイツ語圏と比較しつつ、私の体験、交通行動(Verkehrsverhalten)からレポートしていく。(特にディーゼルの)排気ガス、アイドリング(Leerlauf)、暴走・暴音運転などの問題は言語音声環境に比べれば古典的と思えるほどである。

1) 照明環境

わが国でもドイツでも道路上および道路沿いにある照明に関係した装置の代表は街灯(Straßenlaterne)や(交通)信号機([Verkehrs]ampel)だろうが、よく観察すると、これに類した装置がある。例えば工事関係車両や工事の路上で回っているのを見かける「黄回転灯」(Gelbes Blinklicht)や、片側一方交通(Wechselnd fließender Verkehr)などで日本では黄回転灯と共に設置されていることもある「オーロラ」⁴⁾などが挙げれる。このオーロラは私が観察してきたところでは、(晴れた)昼間は不要に思え、幾度か管轄の県の工事事務所に申し入れてきた。殊にその横に黄回転灯がある場合は過剰照明と思うのだが、県の方もそれなりの対応をしてくれたことはある。

(晴れた)昼間からライトをつけて走る車やオートバイをドイツでも見かけるようになった。私には安全とはほとんど無関係に思える。ただ、2003年の夏より2004年の夏の方がベルリンやポツダムではライト点灯車の台数は減っていた。対応の速さがドイツでは日本よりずっと上という指摘もある。

大分以前のことだが、私が住む家の近くの歩道の街灯が季節を問わず、一定の時間点っていた。昼間の時間が最も長い時節だと、朝、4時半頃には明るくなる。ところが、7時を過ぎても消されないで、県の土木事務所に申し入れ、よりキメ細かい対応がなされるようになってこんにちに至っている。

私が問題にしてきた最大のことはしかし、道路の工事現場や工事中を示す看板に付いている裸電球(鈴蘭燈[すずらんとう])や投光機が晴れた真昼間から誰からも消されずにずっと点ったままになっていることで、ここ1~2年におけるいくつかの印象に残る私の体験、行動記録を年月日の古い順から挙げていく。私のメモにこうした現象が初めて記されたのは2001年11月14日(水)。その後メモの日付は11月25日、27日、12月2日、15日、2002年3月27日と続いていく。以下に挙げる事例は私のささやかな行動範囲内のことだから、金沢市内だけでも、どれだけの愚かな

³⁾ 「交通」が「道路交通」の同義語で使われる点は日本もドイツも同じで、例えば「交通事故」(Verkehrsunfall)は「道路交通事故」(Straßenverkehrsunfall)の意味で普通、使われる。Straßenverkehrsunfallという語はあまり見かけない。語の短縮ということなのだろうが、それほどまでに交通事故が道路に集中しているということだろう。「交通死(者)」(Verkehrstod[-tote])も同様。なお、「車社会」はドイツ語でAutogesellschaftといい、「車中心社会」はautoorientierte Gesellschaftという。

⁴⁾ ドイツ語で公式にはWechsellichtzeichenというそうだが、一般にはこれも[Verkehrs]ampel[交通]信号機と呼んでいるという。ただドイツの「オーロラ」がわが国のそれと同じ形状かどうかは私には定かでない。なお、この装置はドイツでも持ち運び可能(transportabel)だとのこと。

(電力会社だけが喜ぶような) 浪費がなされてきたことだろう。

◎ 2003年8月頃から、私の住む町内や近隣の町内で下水道工事が始まり、いくつもの業者が工事に携わっていたが、すべての業者はこういう裸電球は点けっ放しにしてきた。気がつくたびに私は電球を回して消したり元栓を抜いたりしてきた。業者のひとつF工業に、この電球つける必要ないのではと聞くと、市の方で、点けとくように言うものですからとのこと(10月10日)。それが本当だとすると市の対応に問題がある。あるいは、T建設の背広姿の男性に「上に街灯があるから、この電気、夜も要らないのでは」と話すと、「元栓を抜いておきます」と言ってすぐ対応してくれた。ところが、いつのまにか、また電気が点されている。今度は飯場に何人かいた時に現場監督に言うと「分かりました」とのこと。

同種の体験は数多くあるが、どうやらこの現象の根幹は、一定の電気量の範囲では電気料金も一定だということにあるようだ。数年前、市の水道局のある人が、そういうことを教えてくれた。要するにシステム上の問題ということだった。そこで、ある時、県と市の議会の各会派宛に、このシステムを変えてくれるように文書で要請したが、その後ずっと何の反応もない。対応してくれたのかも知れないが、無駄なことをしたとも思い、ちょっぴり後悔もしている。

◎ 2003年8月21日～9月3日をベルリンで過ごした後、金沢に戻ってみると、私を待ち受けていたのが(ちょっと大げさだが)この鈴蘭灯だった。バスの車中から、昼間なのに誰からも消されることなく点る裸電球が見える。バスを降りて家路に着く道端のいくつもの看板に電球が点る。疲れ切っていたこともあり、この時は回して消しはしなかった。少なくとも2週間の間、これらの電球は晴れた真っ昼間もずっと点り続けてきたのだ。100%の(確信犯的)確信で、そう断言出来る。

◎ 2003年9月9日。数か月ぶりに自転車で犀川の川岸を通ると、恐れていた現象に出合った。橋の両側に、鈴蘭燈がずらっと点ったままだった。近くの仮工事事務所を尋ねても5時を過ぎていたせいだろう、誰もいない。元栓を抜いて電気を全部消す。投光機も点っていたが、川岸へ降りていかねばならず、諦める。実はこの日は伏線があつて、ある土手下の投光機を消さなかったことの後悔がつきまとっていた。1～2年前、同じような場所で同じような現象に出合った際は、近くにいた工事関係者の一人に、これらの電気、不要ではと言ったが、消す様子もなかった。帰宅の途中、あるスーパーの公衆電話から、市に電話した。しかしながら、市に言っても対症療法くらいにしかならないということが近ごろ分かってきた。これまで何回、市に言ったことだろう。その都度「はい、分かりました」とは言うが、おざなりにそう言っている場合が多い。数日後、この橋の工事を請け負うS社に電話し、社長と話をした。周囲の暗さで発光する器具に代えていくと言ってくれた。実際、同社が請け負う別の工事現場では、後日そうなった。

◎ 2003年10月9日。朝9時前に仕事に行く道すがら、T高校近くの道端と正門横にそれぞれ2本ずつの鈴蘭燈が点ったままになっている。工事請負はN建設。電球を回して消す。1週間前にここを数週間ぶりに昼間通ったところ、電球が点ったままだったので、回して消しておいた。ということは、その1週間の中に、いつかは分からないが、再び点けられたということだ。T高校の先生方や事務職員、生徒は誰一人として少なくとも昼間は不要なこの電球が点る異常さに気がつかないのだろうか。そうだ、生徒達の関心時は(当然のことながら?)別のところにあるのだ。そして、先生方や事務職員達はほとんど皆、車で通勤しているだろうから、気づかないか、気づいても降りてまで消すことはない。私も乗せてもらった車の中から昼間に点るこの種の電球を

見かけたことはあるが、車を止めてもらって降りて消したりはしなかった。少なくともこのケースは2回覚えている。気にな(ってい)ることはよく覚えているものだ。

◎ 2003年11月2日。S建設の看板の電気は10月29日の日中消しておいたが、11月2日は日曜ということもあり恐らくまた点いていると思い、スーパーMへ寄るついでに見てみると消えている。その前日にはまた、かねがね気になっていたある坂の上と下のD社の看板2つずつ(ということは「すずらん燈」は2個ずつ看板についているから、計8個)の電球のうち、坂の上の4個は消してあることに気づいた。しかし、坂下の2個が点いている。近くに作業員らしい2人がいたが、その2個を黙って回して消しておく。翌2日、行ってみると坂上の4個と坂下の2個は点いたまま。この状態は11月8日(土)も同様だった。数週間前にこの電気は昼間は不要だから消すように電話で申し入れておいたのだが、土日は仕事がないからということで前日に点けておくのだろう。

◎ 2003年末(あるいはもっと前)～2004年2月10日。私の家の近くで用水の工事が行われた。が、例によって昼間から鈴蘭灯と投光機が「満開」。気づいたのは大晦日。安全性を見極めた上、鈴蘭灯を数個だけ点灯させておいた。しかし翌朝行ってみると、全部点灯している。その用水の前は寺のかなり広い駐車場になっているのだが、向こうの角で交通整理中と思える男がいて横で焚火。上の大きな蛍光灯もいくつか点り、車も何台か駐車している。参拝者の車と思われ、電源はその寺のものかもしれないと一瞬判断したためか、そのまま戻る。この分だと晴れても今日は点ったままなのだろうと考える。10時すぎ再び行くと、点いたままなので、すぐそばの男に聞くと、現場監督は向こうの人だと指さす。照明については私の言い分に同意はしたが、その男も現場監督も工事を請け負っているM社の人ではない。駐車場の照明は既に消えている。休日ということでM社の工事関係者は来なかった訳だ。だから、私が消しておいた鈴蘭灯は消えたままだったのだ。残る問題は鈴蘭灯と投光機の電源が寺と市のどちらのものということだ。翌日そこへ行くと又しても照明が満開。一台のワゴン車がエンジンをかけて止まっている。恐らくM社の人でないと即断し、聞くのは止める。3個所の元栓を抜いて照明を全部消す。前日の夕方、4つ程の鈴蘭灯を残してすべてを消したから、今朝に至るまでの間に誰かが全部点けたのだ。そして次の日(1月3日)は2日の夕方つけておいた3つの鈴蘭灯を消しに朝8時前に行く。次の日も同じことの繰り返し。ただ、皮肉なことに、明るさ暗さで反応する赤っばい管は前日その元栓が私によって抜かれていたから、消えている。つまり点滅していない。その横の、元栓につながっている管はまだ周りが暗いため点滅している。

1月13日、久々に現場に昼間、行ってみるとすべて満開。投光機3個+鈴蘭灯16個。元栓を抜く。状況証拠で何日も点いたままだったのだ。実はこの日の夜、自室の電気とストーブを消し忘れて風呂に入っていた。自責の念。だが、これと用水の所の照明とは訳が違うのであり、前者の場合は私が責任をとればいい。だが、後者の浪費は誰が責任をとる? 1月31日(土)、又してもその場所の照明が点いている。前日の金曜にすべてを点けていったのだろう。駐車場で子供と戯れる若い父親を横目で睨みながら、消す。2月4日もまたまた満開。この場所はもともと用水はあったが照明はない。それでも事故など形状上まずありえない。だから夜でも照明は不要なのだ。事実、工事が終わると夜は暗いまま。危険があると仮定しても、その度合いは工事の前後で変化なし。工事終了間際、雪が積もっていたとき、朝、工事現場に行ってみた。パワーシャベルに乗っていた現場監督に、これらの照明、必要ないでしょう、と言って元栓を抜いた際、雪で滑り転げ落ちそうになる。その男は理解してくれ、一言すみません。そして、危ないですよとも言っ

てくれたが、工事はもう終了間際。あつけない「幕切れ」であった。

◎ 2004年1月21日。金沢駅近くのR社の3箇所の照明を消す。この業者についても現場監督と私、市の管轄の課と私との間でいろいろあったが、省略する。

◎ 2004年4月28日。H社の照明のことで市に電話。4月30日には乗せてもらった車の中からK建設の照明に気づく。5月1日(土)にH社の現場監督に言うと、一言「すみません、注意します」。近くで工事していたK建設の方は休みと

か。元栓抜く。どっちみち黄回転灯は回っている。5月22日、K建設の照明の元栓抜く。6月1日、同建設の照明の件で監督役所組合のU理事長に申し入れるも、にやにやしなながら、はぐらかされる。初めからまともな対応はしてくれそうもないとの直感が当たった。

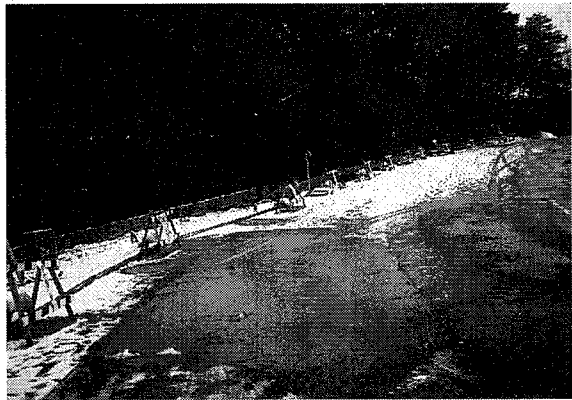
◎ 2004年6月5日。前に書いた坂の工事がD社からM社に代わっていた。鈴蘭灯と投光機2個を消す。6月7日にM社の現場監督は「点けといて具合悪いですか。電気代もう払ってしまっているの」と言う。

◎ 2004年7月7日(水)。期日前投票のため、かなり遠くへ行く。その途中、照明が満開の工事現場に出くわす。「オーロラ」を除き、すべて消す。

◎ 2004年8月19日。もっと最近では、2社が請け負って家の近くで行われている下水道工事でI建設の鈴蘭灯が昼間でも消されないでいたことにベルリンとポツダム滞在からの帰国後に気づいた。この照明は8月19日に気づき消しておいたから、私の外国滞在中ずっと点っていたことになる。そこで交通整理をしていた男に、あの照明、不要では?夜も上に街灯があるし。なぜ点けるのだろうと聞いてみると笑みを浮かべて、目立たせるのでは、と言う。男は交通整理が仕事で、そういうことは管轄外だから、私は「ともかく消しておきます」と言って電球を回し、元栓も抜いた。翌20日にI社に電話し、社長が留守のため、電話に出た人に消しておいたことなどを伝える。もう1社は、かつて犀川の橋の件があったS社で、又しても鈴蘭灯が点っている。回して消す。そして9月30日、仕事に行く途中、今度は鈴蘭灯が工事現場を囲むようにして10個ほど点っている。元栓を抜いた。近くにいたブルドーザーの男に現場監督は?と聞くと、向こうを指さすので、その男に、前に~社長にも言ったけど、あの照明、少なくとも昼間は要らないのでは?消しときましたからと言う。その男、そちらの方を見てどこのことか分からない目つきではあったが、一言、「分かりました。すみません」と言った。

昼間に点るこの鈴蘭灯をかつて現場の人に指摘すると、一日中点けておくのだと、うそぶかれたことがある。また、鈴蘭灯を回して消したら、私の自転車の横につけたワゴン車のドライバーから「あんた、電球盗んだろう」と言われたこともあった。

私のこのこだわり、いらだちはどこからきているのか。私の住む町内でも晴れた真つ昼間から蛍光灯が点いていることがあるが、これは別に気にならない。蛍光灯の場合はエネルギーの消費



晴れた昼間から消されない「すずらん灯」と投光機(金沢)



「素朴な」工事現場（ポツダム）

が鈴蘭灯や投光機より少ないだろうし、修理して取り替えれば町会の経費がかかるからだと自分では思っている。一方、鈴蘭灯などの場合は、私がそこに怠惰とか怠慢をみるからかもしれない。とはいつてもそれは工事関係者とかそれを管轄している市だけの怠惰ではなく、そういう現場の脇を通っても何とも感じない、したがって（他人の目を気遣う必要がなくても）消そうとしない一般の人達の怠惰なのだ。消し方が分からないなどということがあるのかもしれない。投光機は元栓で、鈴蘭灯は回して

も消せる。

昼間でも冬など急に暗くなることがあるし、夜は暗いからこの種の照明は必要だというような一見もってもらいたいことを市の関係者から聞かされたこともある。後者は認めてもいいが、しかし、夜ついていたこの種の照明が明るくなってから消されたためしは、私が現場監督や市の関係者に申し入れた以降ならともかく、全くない。上に街灯があるのだから、工事現場が危険でない限り、この種の照明は夜間も必要ない。こういうことを主張し、「実力行使」もしてきた私は、こと照明に関しては、合理性の病い（中島義道氏）にかかっているのかもしれない。電気ノイローゼ、電気病（同氏）なのかもしれない。私の体質、人となりに関係しているのかもしれない。

しかし、私の主張、行動が効果を上げていることもある。土日など、また照明が点いているのではと思い、行ってみると照明が消えている場合だ。そういう時はホッと、遠回りをした時などは拍子抜けさえするが、しかし、こういう状態がまっとうなのだとも思い直す。

1982年、初めて渡独した際、西ベルリンの地下鉄の車内灯が電車が地上に出るたびに消えるのを見て、その実直さに感心したことを思い出す。帰国後、金沢の鉄道管理局に向いて、晴れた昼間は車内灯は不要ではと申し入れたところ、あれは車や自転車などの電気と同じく自家発電だからエネルギーの消費は（あまり）ない、器具の磨耗はあるがとの返答に、なるほどと思ったものだ。

1986年4月26日、この日付は暗記している。初めてのスイス滞在から帰って数日後のことだったからで、チェルノブイリの事故が起きたのだった。その後、反原発の運動がわが国でも盛んになったが、金沢での広瀬隆氏の講演の行き帰りにスパイクタイヤ（Spikesreifen）が何とも形容しがたい音をたてて路面を削っていた。反原発の運動家のある知人にこのタイヤを話題にしたら、「耳が痛いね」と言った。私は「目が痛いんですよ」と答えたのだが、無意識に洒落になった。彼は大多数のドライバー同様、このタイヤを使っていた訳だが、彼のこの言は私の好きな人柄を示している。

このタイヤに対する私の嫌悪感は大変なものだった。世間は粉塵（による健康被害）を問題にしたが、私の場合はそれより、路面を削る音に嫌悪した。そして、ただ不快と言っていただけで

は説得力が弱いと思ったためかどうかもよく覚えていないが、車のために敷かれたアスファルトを車が削り、路面の補修に莫大な税金が使われているなどの訴えをした。ドイツに遅れること18年、幸いわが国でもこの忌まわしいタイヤは平成4～5年に姿を（ほぼ）消した。

2) (テープ) 音声環境

ドイツとの差はこちらの方が大きく、中島氏も書いているように「解決」はるかに難しい（と私も思う）。ごく一部のトラックだが、「左へ曲がります（ご注意下さい）」とか「バックします、バックします」などのテープ音声で、周りに誰がしようといまいと無関係に今日も発せられる。バスに乗れば引っぱりなしにマナー放送を始めとする放送がなされる。バス会社の担当の人達と話しても一向に改善されないどころかエスカレートしてきている。こうした路線バスと例えばスーパーなどの送迎バスのサービスの差はどこからくるのだろう。車をもたなかった私はスパイク最盛期を中心に以前は公共交通VS個人交通 (Individualverkehr) という図式で積極的にバスを利用してきた。ところが、バスの方が大きく様変わりしてしまった。なぜなのか。キーワードはロビー (Lobby) なのかもしれない。からくりがあるのだ。

金沢市が委託しているゴミ収集車の今でもよく耳にする「左へ曲がります」のテープ音声が記された私のメモの日付は2001年9月11日（「同時多発テロ」の日!）になっているから、もう少なくとも3年も同じ状態ということになる。私の住む町内には時々、地球環境に優しくなどという大テープ音声を発しながら古紙回収車が来る。町内に廃品回収をしにくるこの業者には直接、あるいは電話で「定期的に回収されているのだから、普段は来てほしくないが、来るなら音量を押さえてほしい」と言ってきた。回収の金で備品を購入している小学校にも何度か申し入れたが、なかなか分かってもらえない

「ただいま、地域安全運動が行われています。～な青年を育てましょう」などという類のテープ音声には本当に苛立つ。虫酸が走ることもある。火災予防を呼びかける消防車が大音響で夜8時台に我が家の近くを（2～3年前の話だが）通った時は、その場で抗議し消防車の走行を阻んだら、運転していた男が助手席の男を示し合わせ、携帯で「おまわりさん」を呼んだ。私は、こういう放送はうるさく迷惑なだけ、排気ガスもばらまく、火災が心配なら回覧板などで、通知すればよい等々、合理的な理由を挙げたが、じゃあ、おたくはバスにも乗らないのか、などと言う。別の機会には公民館に電話で申し入れたことも何度かある。

大怪我、まかり間違えば死に至ったかもしれない事もあった。夕食前にトラックのテープ音声を家の真前で聞いたこと、そしてその後、大量の晩酌をしたのがいけなかった。酔って近くの高校へ2匹の犬を連れて散歩に行った。このこと自体は時たまあることだ。学校の石段のところで足を踏み外し、石段を10段ほど、ころげ落ちてしまった。額が血でべっとり染まった。2000年の夏のことで、骨折でもしていたら、予定していた1ヵ月半のヴェルツブルクとフライブルク滞在が延期になっていたかも知れない。

2004年の春、22年振りに訪れたドイツ・レーゲンスブルクのバスのテープ放送は当時と同じくバス停の案内だけだった。初めて訪れたゾーゲンのバスは何の放送もなかった。これを誰やらの様にサービス不足とするのは勝手だが、ではバスのテープ案内放送、とりわけマナー放送が、バス停名の案内などは別としてサービスなのか。そうではない。

2003年の春、ドイツ・カールスルーエに行った時に乗ったバスでは運転手がマイクで行き先などを告げた後、最後に「今宵も楽しくお過ごし下さい」（Schönen guten Abend!）と言った。する

と年配の婦人を中心に「ありがとう」(Danke schön!)と言うのだった。

電車とか列車とて同じこと、ドイツでの放送はテープであれ、一般にまだましなマイクであれ、必要最小限に限られている。2003年の夏にベルリンのSバーンの車内で聞いた「自転車は車内の～に置いて下さい。Vielen Dank! (ありがとうございます)」のテープ放送は2004年の夏には消えていた。

放送が少ない分、放送の効果も大きくなる反比例を示すと言えるのではないか。駅のホームで耳にする「Zurückbleiben!»(「白線の」うしろにお下がり下さい)など。

テープ音声がわが国では減るどころか増えてきたのは日本の美徳とされてきた「やさしさ」と関連があるのだろうか。日本的「あいまいさ」と関連があるのだろうか。こうした領域では、日本の異文化コミュニケーションなど、いかにして可能なのか。

あとがき

このレポートを書くにあたり、書物として説得力があったのは、そしていつ読んでもあるのは、本文中でも名前を挙げた中島義道氏(電通大)の諸著作のみである。核心部分は大学教育開放センターの2003年度と2004年度の講義でも触れた。

もともとはポツダムの公共交通文化について書く予定だったが、このレポートの方が日々の私たちの生活に直結していて、お説教(Moralpredigt)的な匂いはあるかもしれないが、より多くの人に読んでもらえそうなので、こちらにした。日本的「あいまいさ」を温存し、あるいはそれを利用さえしつつ、安定した立場を保っておいて、そのもとでいろいろ言い、行動しても迫力はないことを意識しつつ、調査研究活動を続けたい。

このレポートを書くに際し、ポツダム交通企業(ViP)のBernd-Michael Rabisch氏から教示を受けた。